

京都産業大学名誉教授 功

博物館・展覧会の関係者に感謝

昨年はずいぶんコロナ禍が続く中でも、嬉しいことがいくつかあった。その一つは、東京国立博物館(以下、東博)一五〇年記念の特別展覧会である。

私は学生時代から特別展を観るために上京することが楽しみであった。また、定年後十年間、柏の研究所へ通う機会、よく東博へ立ち寄り、表慶館や東洋館および法隆寺博物館の常設展示も観ることができた。

しかも、昨秋の特別展は、N市区や民放で深掘りの案内番組があり、それらを観てから、終わり近くに「平成館」で館蔵の国宝数十点を通覧することができた。その感銘は正しく筆舌に尽くしがたい。

この東博開設に尽力した町田久成(一八三九-一九七)は、薩摩の藩士で慶応元年(一八六五)英国に留学し、パリ万国博覧会も視察して帰国。明治五年(一八七二)、文部省博物館主催の「湯島聖堂博覧会」に尽力。十年後に「東京帝室博物館」の初代館長に就任したが、すぐ辞めて受戒し、

その間に町田は、岡倉天心やフエノロサたちとの親交を通し、維新後放置されていた古美術の流出を防ぎ保存に尽くした。しかも、この博物館が同十九年から宮内省所管となり、やがて京都にも奈良にも帝室博物館が設けられ、さらに全国で公私の博物館・資料館ができていく。

しかし、どんな地方の資料館であれ、古文化財を収集し、保管するにも調査し展示するにも、さまざまな関係者の大察な苦心と努力を要する。それは外部の見学者にあまり知られていない。ただ私は、数年前に「京都の大丸展」を企画し実現する際、その一端を垣間見て、心より感謝するほかなかつた。

そこで、あえて申せば、今や「断・捨・離」とか称して一見役立たないものを処分するような風潮に自重を求めたい。どんな家にもある先祖たちが大事にしてきたものは、自分や子孫が「ファミリーヒストリー」を探る手がかりであり、最も身近な文化財といえよう。

それらを可能な限り調べて、残すべきものはせめて映像データだけでも遺す工夫と努力を要する必要がある。もしもそれが公的な資料館などに収蔵されたら、後世の歴史家に感謝されるかもしれない。

園城寺の住職になっている。

京都産業大学名誉教授 功

遺書を暗誦して遺族に伝達する

先般(師走)、久しぶりにシネマ館で封切映画を観て、予想以上に感動した。辺見じゅん原作「収容所」から来た遺書(文春文庫)に基づく「ラゲリ」より愛を込めてである。

主人公の山本嶮男氏は、明治四十一年(一九〇八)隠岐に生まれ、東京外国語学校でロシア語を学び、昭和十一年(一九三六)から南滿州鉄道の調査部に勤め、結婚して三男一女に恵まれた(主演:三宮和也、妻役:北川景子)。

しかし、同二十年八月の日本降伏後、彼(37)はソ連軍の捕虜となってシベリアに抑留され、過酷な重労働とソ連共産党の洗脳工作に耐えながら、失意の仲間を明るく励まし続けた。その凄じい状況がリアルに描かれている。

しかも、抑留九年目に喉頭癌のため「ダモイ(帰国)」の悲願も空しく他界した。その病臥中に家族あての遺書を必死に綴ったが、それすら没収を逃れ難い。そこで、仲間数名は、その遺書を分けて暗記し、生き延びて二年後に帰国すると、家族を捜し訪ねて、各々に覚えた部分を涙ながら

「君たちはどんなに辛い日があろうとも、光輝ある日本民族の一人として生まれたいことに感謝することを忘れてはならぬ。日本民族こそは将来、東洋・西洋の文化を融合する唯一の媒介者、東洋のすぐれたる道義の文化・人道主義を以て世界文化再建に寄与し得る唯一の民族である。……」

また君達は……人類の文化創造に参加し、人類の幸福を増進するといふ進歩的な思想を忘れてはならぬ。偏頗で矯激な思想に迷ってはならぬ。どこまでも真面目な、人間は結局、自分一人の他に頼るべきものがないという覚悟で、強い能力のある人間になれ。自分を鍛えてゆけ！

自覚ある立派な大人になれ。……学と真理の道においては、徹頭徹尾、敬虔でなくてはならぬ。……」

これは遺族だけでなくすべての日本人に向けられた期待とも受けとめられる。少なくとも歴史の研究に携る私共は、過去の史料(遺書)を調査・研究(暗誦)して現代の人々(遺族)に伝達する役割を担っているのだと思われ。